

大阪平野における戦国時代の環濠自治都市に関する研究

大阪工業大学工学部 石黒 正俊

大阪工業大学大学院工学研究科 赤松 貴史

大阪工業大学工学部 岩崎 義一

はじめに

現在もなお環濠自治都市としてその名を残し江戸初期の町割りを残している平野郷は、大阪市平野区の中心部に位置し文化的に豊かで先進の地域である。本研究では平野郷と近隣の環濠自治都市を比較するとともに、特にかつての風情が残る平野郷の市街化動向などについて、その史的内容を整理することにより、今に風情を残し得た要因を明らかにすることを目的とする。方法は図書館・地域資料館から文献を収集し整理分析を行った。

環濠自治都市間の比較

1 堺の環濠自治都市：堺の最初の自治組織は開口神社の運営組織であり、ここから会合衆と呼ばれる自治を行う豪商や貿易商人達が生まれた。¹⁾戦国期の堺は全国流通の拠点であり、発展の基礎には手工業・商業都市として近畿経済圏の要となり各地方の経済圏と密接に連携した経済活動と、それを刺激促進する要因として海外貿易があった。²⁾³⁾そして会合衆によって住民自治を強めながら自治都市としての発展につとめ、町の周囲に環濠をめぐるして自衛し都市生活を維持してきた。やがてその富力を背景にして商人たちは東南アジアをめざし、また茶の湯に代表される都市文化を創造した。商人の蓄積した富は数多くの仏教寺院の建造に寄進された。¹⁾これは中世末のヨーロッパ商人が死に際して儲けた富を協会に寄付し神の元へ発っていくのと同じように、堺商人も寺院に寄進し仏門に帰依したと考えられる。

堺の経済を支えていたのは、中国産の生糸を独占的に購入できる割符の特権、中国から渡来した職人の技術移転によって明様式の高級織物製造販売、さらに鉄砲製造である。³⁾これらもやはり会合衆の力によるところが大きい。ところが大阪夏の陣(1615)・島原の乱(1637)で大きな戦いは終わったため鉄砲に対する需要は減少した。⁴⁾徳川時代は中世の黄金期であった堺のあとを受け、城下町ではなく幕府直轄地の自治都市として職人的工業を基軸産業とする道を歩んだ。商業都市としての繁栄は大阪に奪われたが、伝統技術に生きる職人の町として今日に至る。

2 尼崎の環濠自治都市：尼崎の繁栄のピークは堺・平野より早く13～14世紀であり、魚商人が瀬戸内海から房総半島までを商圈とし、後述の河内木綿の台頭までは武庫川流域産の綿は全国で最も品質が優良とされていた。⁵⁾早い時期に繁栄したのは都に近かったため中央集権の手が及びやすく、かつ交通の要衝であったため漁民のなかから商人が派生的に誕生した。それ以前は漁業や運送業などに従い、事あれば水軍となる漁民が西国への渡航を請け負っていた。漁民が運送業であったと同時に水軍であり、場合によっては海賊でもあった。⁶⁾古くから培われた海に親しむ生活と商業の行動範囲の広がり、海民の伝統が近世尼崎の漁民や生魚商人を生み出すこととなった。⁷⁾

自衛自治においては幾多の武庫川の氾濫で荒廃したところを明徳年間(1390～93)に再開発し、生嶋四ヶ村(旧立花村)(上ノ島・栗山・大西・三反田)が成立した。この四ヶ村に一村ずつ開発の頭として座敷衆という宮座をもうけ、自衛のために濠を掘り、自治を始めていった。⁸⁾そして座敷衆が自衛自治の中心として活躍した。⁹⁾これらが七松環濠・武庫環濠・次屋環濠・富松環濠と呼ばれている。¹⁰⁾¹¹⁾尼崎市域の環濠集落は大和平野に見られるような幅の広い堀に囲まれた規模の大きなものはないが、他の環濠自治都市との共通点としては中世の発生ということが挙げられる。

3 平野の環濠自治都市：有力開発名主であった七名家の先祖は坂上氏である。平野と坂上氏との関わりは平安時代、坂上広野(さかのひろの)林呂が莊園を請け賜わって以来子孫代々貴族的生活を守り婚姻の際も京都の公家に限り土地のものとはせず、特別な家柄をもつものとされ町民の上に位する階級とされていた。¹⁾¹²⁾¹³⁾七名家の発生は10世紀から分派しはじめ12世紀にはほぼその基礎を固め15世紀に完成した。すなわち最初の坂上氏と一族での領地開発時代、各氏が名田を開発し名田主となった時期、名田開発の性格が失われ、戦国時代の社会的混乱期に惣の確立による町の自衛のための行政分担に関わる時期、の三つにわけられる。¹²⁾当時では平野郷支配の頂点を極める家系であり七名家は時代の変遷に伴い栄枯盛衰があったが、最も富裕だったのは末吉家であり末吉船でルソン・ベトナム回東

京に渡航するなど最も活動していた。¹³⁾

戦国時代には大和・河内一円の商業特権をもつ商人などが活躍し多数の富裕な商人が生まれた。そして権力者と商業上の結びつきが生まれた。³⁾そこで七名家が有力商人層と組んで結束し戦国期の自衛自治のために七つの集落を一つの郷に集め環濠都市を作り上げた。

大坂夏の陣では七名家も大坂・徳川方双方に分かれ平野郷の大部分は焼土と化した。¹¹⁾再建には徳川方が力を入れ自治都市の復活を志し封建社会の体制強化の中で七名制度による自治運営の存続と諸権益の確保につとめた。¹²⁾¹³⁾

一方、地域産業と地理的要因の関係についてみると、河内における綿作は天正年間(1573～1592)頃に高山山麓の台地で栽培され河内平野に及んだとされる。河内木綿の栽培がさらに広がったのは、幾多の氾濫からの復興の為に大和川が宝永元年(1704)に現在の流路に付け替えられてからである。旧大和川敷は砂地と豊かな地下水が綿作には最適であった。また大坂という商業都市を控えていたので河内は全国一を誇る綿の生産地となった。¹⁴⁾

宝永～宝暦年間(1704～1764)の頃、平野郷周辺の田畑の約7割が綿作地であったといわれる。平野郷では繰綿が多く、近隣の八尾では木綿織りが多かった。¹³⁾平野郷には宝永年間に木綿繰屋が166軒もあった。宝永～宝暦年間が平野郷の最も栄えた時代で、人口は1万人を超えた。¹⁾平野郷には繰綿問屋・カセ糸屋・木綿商などが発達し宝暦四年(1754)の取扱量は四十五貫(1688トン)にも上った。安政5年(1858)の修好通商条約(安政五カ国条約)・明治29年(1896)の外綿輸入関税撤廃により河内木綿は外国産に駆逐され長く続いた綿作も廃れた。¹²⁾¹⁵⁾産物の輸送には、旧大和川の氾濫復興を目的に運行開始された平野川の柏原船、久宝寺川の剣先船が活躍したが、大和川付替に伴い水量が減少し隻数縮小を余儀なくされたが便数は増加するもの

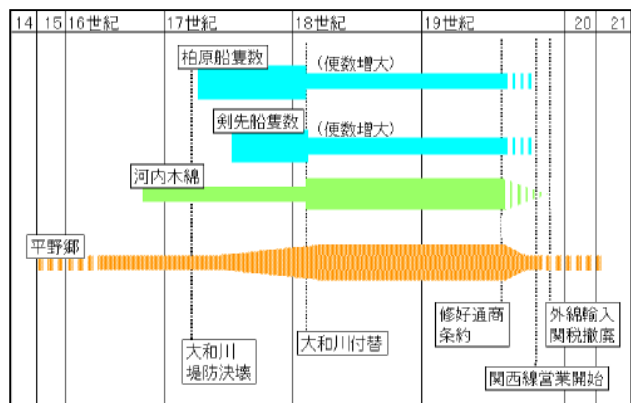


図1 河川と木綿と大和川

の旧国鉄関西線の営業開始により廃止となった。

平野が内陸に位置しながらも、堺・尼崎などのように発展した要因として、街道の交点であったことも重要であるが、多様な地場産業と旧大和川を擁した河川港湾施設があったことがあげられる。大量の荷物を天下の台所であった大阪へ運ぶのに適した河川が存在が平野の繁栄を支えたのであった。

(図-1・表-1 参照)

以上を整理したのが表-1 である。環濠内部には神社・寺院を中心とする広場をもつものが多く寺院の宗旨は浄土真宗が多い。特徴は住民独自の動きが見え始めたことである。住民の生産活動の範囲内のことで動き始め、それは自分たちの祖先・開拓の先達・村の守護神などの祭りを村中で始め、その当番を村中が持ち回りで始めた。³⁾¹²⁾¹³⁾これらの祭りで演ずる踊りの為に村の組織が組まれていく。それが会合衆・七名家・座敷衆に発展した。これからもわかるように主要産業が輸送業であること、海外からの伝来技術の吸収の拠点があったこと、地元有力名主の存在が大きかったこと、陸路・水上面交通の要衝であったこと、広く庶民に普及した浄土真宗の拠点の一つであったことなどのようにいずれの環濠自治都市においても共通している。こうした中で平野郷は主要産業において農業とその産物の加工業など多様な業種構成と集積を有しており、このことが現代にまで色濃い影響を残し得た大きな要因の一つであろう。

表-1 各都市の特徴

	堺	尼崎	平野
主要産業	外航貿易業	内航海運による地域交易	綿花・木綿・蒟蒻・薬・酒・鉛などの加工・問屋業 物資輸送
伝来技術の吸収による独自産業	鉄加工技術などの鍛冶産業 ポルトガルより伝来	造船技術・油製成 新羅より伝来	油製成・馬具 百濟より伝来
豪商による自衛自治	会合衆	座敷衆	七名家
交通の要衝	紀州・熊野・長尾・竹内街道の交点 堺港で朝鮮・琉球・南蛮と貿易	西国街道・有馬道・魚屋道の交点 瀬戸内海で海運	奈良・八尾・中高野街道の交点 平野川で柏原船の舟運
宗教	浄土真宗が直轄寺院を建立。他の多くも浄土真宗系寺院	浄土真宗系寺院	融通念仏宗総本山。他の半数が浄土真宗系寺院

平野郷の都市化の動向

まず平野郷周辺の変化について、江戸時代から明治、

大正、昭和初期、昭和 50 年代の 5 時点で表した(図-2.3.4.5.6 参照)。¹⁶⁾¹⁷⁾それによると、昭和に入り平野郷周辺に街区が徐々に形成され、戦後の復興で町割りの整った街区が形成されたことがわかり周辺の市街化は最近になってからといえよう。平野郷周辺は、梅田・難波・天王寺という南北軸より遠く東南に位置しているため都市化が遅れた。もう一つは軍事拠点にもなった八尾空港の存在があり終戦後の米軍からの全面返還まで周辺の統制がなされ開発の波が届かなかったことも考えられる。しかし戦後急速な経済発展とともに環濠は埋められ、農地は住宅地に変わり平野郷も住宅地の一部となった。¹²⁾¹³⁾一方、環濠内の市街化動向をみると町割りには往時のままで残存している。

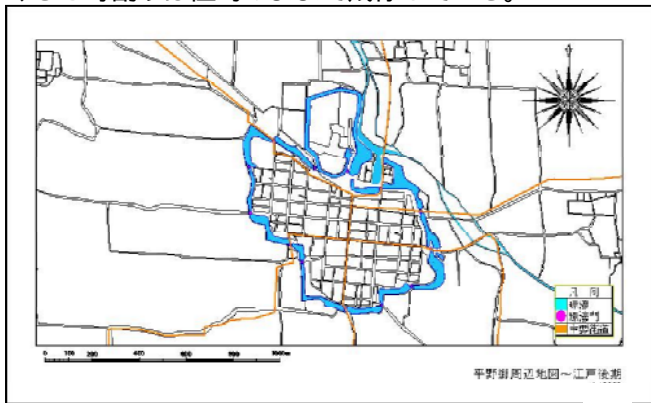


図-2 江戸後期

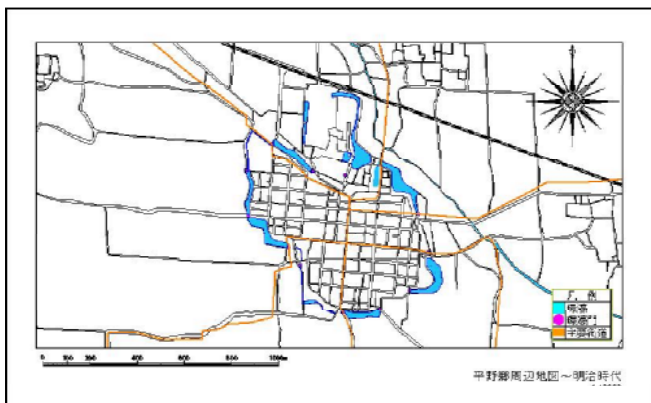


図-3 明治時代

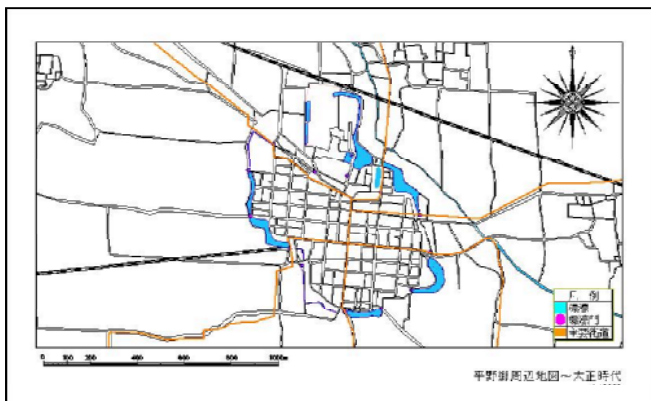


図-4 大正時代

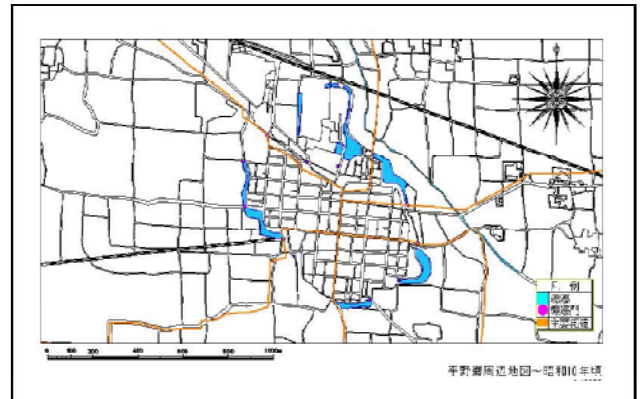


図-5 昭和10年頃

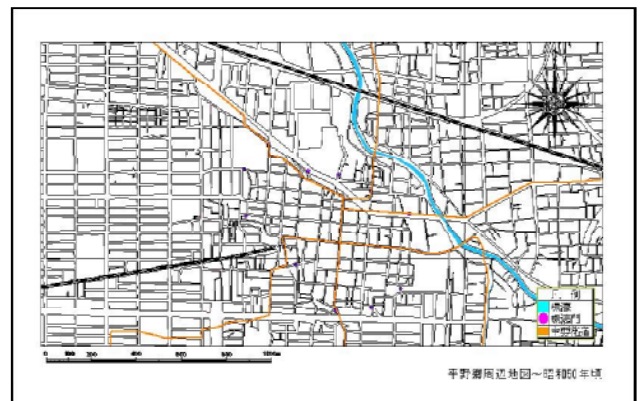


図-6 昭和50年頃

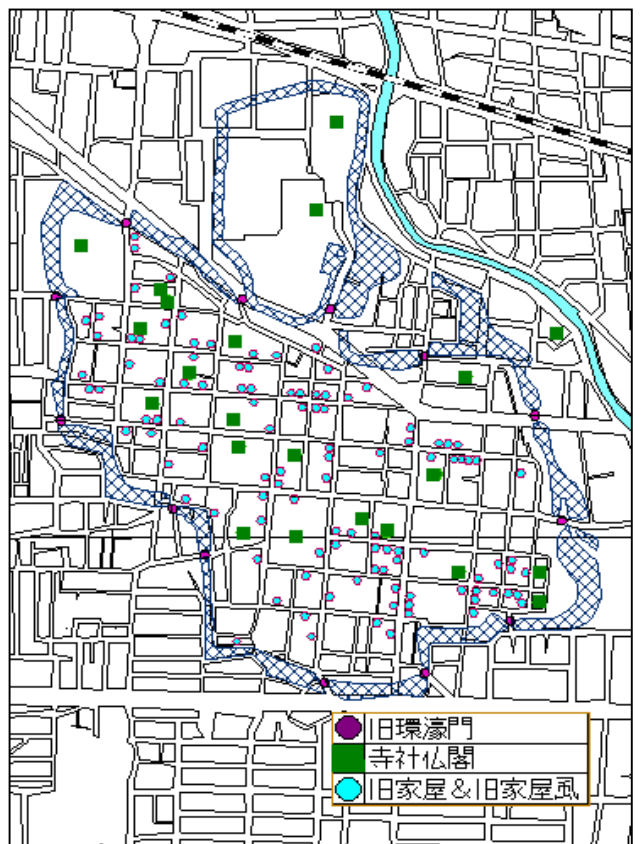


図-7 環濠内寺院・旧家屋分布地図

こうした地図(図-7 参照)で環濠内の現存する寺院・旧家屋(旧家屋風建物含む)をみると寺院は北西から南東方向に分布しており、これは大阪と奈良を結ぶ街道沿いに建立され利用されてきたためと考えられる。¹⁸⁾旧家屋の分布に偏りは見られないが、主要街道沿線地区に比較的まとまって残存している。これらは現在でも住民の手により自主的に修繕などで手入れがされており良い状態で残されてきている。ここには住民の町並み保全と町づくりの意識が継承されてきていることが大きな要因となっている。なお図-7の環濠は江戸後期の形状を現在の街区に表したものである。

まとめ：

3都市とも物資の集積地として成り立っていたことが第一にあげられる。そしてこれを裏打ちするかのよう環濠自治都市の特徴として、商業・独自の産業・豪商による自衛自治・交通の要衝という4項目が深く関係し、発展には地理的要因が大きく関わっていたことが言える。

このことより環濠自治都市というのは恵まれた地理的要件と、先進の技術を扱える職人、先を見越した豪商の存在に影響するところが大きいと考えられる。また周辺街区の主な特徴としては、中心に核となる部分があり、それを取り巻くように発展していくことが明らかとなった。そして平野郷の繁栄とかつての風情を残してきたの要因として次の4項目が挙げられる。

要街道に貫かれた地の利良い土地である。

敗戦直後より市街化は進行するが、格子状街路は現在も残るなど、古くからの都市骨格が長きにわたって残存していた。

家屋が多数残っており新築住宅も旧家屋を模して建てるなどの生活文化と習慣等が残存している。

市開発の圧力が直接入りにくい土地柄である。

<参考文献>

- 1) 堺・海の都市文明 角山榮 PHP 新書
p24～41・60～130・186～201
- 2) 大阪と堺 三浦周行 岩波文庫
p20～44・97～149・160～180・182～219
- 3) 近世大阪の経済と文化 脇田修 人文書院
p12～31・44～66・74～167・208～215
- 4) 秀吉と大阪城 岡本良一 清文堂
p64～69・181～202
- 5) 行基と渡来人文化 米山俊直・辻一郎 たる出版
p14～22・36～43・50～74
- 6) 淡路史を見直す 武田精市 神戸新聞総合出版センター
p49～77
- 7) 大阪春秋 64号 大阪春秋社
p28～34
- 8) 大阪春秋 27号大阪春秋社
p56～58
- 9) 尼崎市誌第2巻
- 10) 大阪春秋 58号 大阪春秋社
p8～9・50～59・60～74・76～82
- 11) 大阪の歴史力 酒井一・会田雄次・大石慎三郎・石川松太郎・稲垣史生・加藤秀俊 農山漁村文化協会
p40～46・78～113・201～223・236～241・304～307・314～335・364～384・508～514
- 12) 平野郷町誌 平野公益会
p1～6・39～69・238～431
- 13) 平野区誌 平野区誌刊行委員会
- 14) 平野の歴史 酒井忠雄
p1～14
- 15) 大阪春秋 44号 大阪春秋社
p12～37・42～45・49～51・122～129
- 16) 近畿の古街古図
- 17) 図集 日本都市史 高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅 東京大学出版会
p14～17・132～133・152～153・266～267
- 18) 大阪市建物用途別土地利用現況図
1970・1980・1997・2000